

# 田中正造と孟子

三浦 頭一郎

## 目次

- 一 田中正造と孟子
- 二 田中正造の思想と孟子
- 三 田中正造の思想的因子

### 一 田中正造と孟子

本稿は田中正造に対する孟子の影響を考察する研究ノートである。

まず田中正造と孟子との関わりを整理しておきたい。<sup>\*</sup>

※本稿では、孟子の言葉は、小林勝人訳注『孟子』上下巻（岩波書店、一九七二年）の訳文によっている。また田中正造の言葉は適宜現代語訳を行っている。

田中は幼少期に地元の赤尾小四郎の塾で四書五経（四書は「大学」「中庸」「論語」「孟子」、五経は「詩経」「書経」「礼記」「易経」「春秋」）を学んでいる。田中が一四歳のとき赤尾が死去し、それ以降、田中は体系的に学問を修得する機会を失った。そのため彼は生涯にわたって自らの無学を口にするようになるが、田中の知識欲が旺盛であったことは

拙著「三浦二〇一七」で記した通りである。田中の孟子との関わりもまたこれで終わらなかつた。

田中は一八七〇（明治三）年三月に江刺県附属として花輪分局（現在の秋田県鹿角市）に赴任するが、同地に残る『寸陰館日誌』同年五月三日の条に「田中氏より趙註孟子四冊御返濟」とあり、田中が孟子四冊を借り出し、返却していたことが分かる。この記事について前澤敏は、田中が赤尾の塾で学んだ四書のうち孟子四冊を繰り返し読書したのであろうとしている「前澤一九七七」。

ほかにも田中と孟子の関わりをうかがわせるエピソードがある。薄田泣菫（詩人・随筆家、一八七七〜一九四五年）によれば

今はもう三十年のむかしにもなろう。私が二十歳足らずの頃、早稲田鶴巻町のある下宿屋に友達を訪ねたことがあった。狭い廊下を通りかかると、障子を明けっ放しにした薄汚い部屋に、一人の老人が酒を飲みながら、声高に孟子を朗読しているのがあった。机の上には、小皿に唐辛を盛ったのが置いてあって、老人は時々それをつまんで、鼠のように歯音をたててかじっていた。「誰かね、あの老人は。」「あれが田中正造だよ。鉾毒事件で名高い……」私はそれを聞いた瞬間、あの爺さんのはげしい癩癩を、唐辛のせいのようにも思ったことがあった「薄田一九四〇、商二〇一三」。

とこう。

また、雑誌『日本及日本人』が一九〇七（明治四〇）年一月三日号で「予の好める及好まざる史的人物」という特

集を行っており、その中で田中は「好める史的人物」として孟子を挙げ、孟子の文章も記している。それについて小松裕は

手許に『孟子』があつて、それを参照して書いたのではないだろうことが、いささかの脱漏になつて表れており、正造がどれだけ孟子を熟読していたかをうかがわせる〔小松二〇〇一〕。

とされている。

以上のことから、田中が孟子を好み、親しんでいたことが分かる。

次に、田中の思想における孟子の影響について見ていきたい。

## 二 田中正造の思想と孟子

民を貴しとなす

孟子の言葉に

民を貴しとなし、社稷（国家）之に次ぎ、君を軽しとなす。

民の樂を楽しむ者は、民も亦其の樂を楽しむ。民の憂を憂うる者は、民も亦其の憂を憂う。樂しむにも天下と以よにし、憂うるにも天下と以よにす。然くにして王たらざる者は、未だこれ有らざるなり。

というものがある。孟子によれば、最も尊重されるべきは民であり、次が国家で、君主は最後であった。民と共に樂しみ、民と共に憂うのが王である。

田中正造の言葉に

民を殺すは國家を殺すなり

法を蔑ろにするは國家を蔑ろにするなり

皆自ら國を壊すなり

財用を濫り、民を殺し、法を乱して、亡びざる國はない、これをどうするか

右質問におよび候

というものがある。一九〇〇(明治三三)年二月一三日に發生した川俣事件を受けて連日質問書を提出していた田中が一七日に提出した「亡國に至るを知らざれば之れ即ち亡國の儀につき質問書」である。さらにその質問演説では

我が日本が亡國に至っている。政府があると思うと違うのである、國家があると思うと違うのである。政府が人民

を殺す。人民を殺すのは、己の身体に刃を当てると同じことである。自分の大切な人民を、自分の手にかけて殺す。これで国が亡びたと言わないで、どうするものでございませうか。

と獅子吼した。田中にとって、民を殺すことは国家を殺すことであつた。民があつて国家があるのであつて、人民を傷つけることは国家が自らを傷つけ、自ら滅びることであつた。

### 王道国家（小国主義）

孟子の言葉に

力を以て仁を仮る者は覇たり。覇は必ず大国を有つを要す。徳を以て仁を行う者は王たり。王は大を待たず。……力を以て人を服する者は、心服せしむるに非ざるなり。力足らざればなり。徳を以て人を服せしむる者は、中心より悦びて誠まことに服せしむるなり。

というものがある。力で政治を行う者は覇者であり、大国を必要とする。これに対し徳で政治を行う者は王者である。人々が覇者に従うのは、覇者に心服しているからでなく、力で適わないからにすぎない。だから覇者は大国を必要とする。王者は大国を必要としない。人々が心から悦んで従うからである。

田中正造の言葉に

日本人の根性小さく……わずかに満洲を得て喜ぶ。笑うべきのみである。……一人一人を救えば、その愛は世界に及ぶ。満洲を得て満足する者の心の小ささ、業の卑しさ、憐れむべし「一九〇六（明治三九）年一二月書簡」。

というものがある。田中は日露戦争後の力による日本の大国化に価値を見出さず（日清戦争の頃まではそうでもなかったが「小松二〇〇一」）、国家が被害民を救済し、そうした国家の愛が世界にも及ぶような、小さくとも徳のある国家を構想していた。また

国は、人と同じで、体格が良いからといって必ずしも尊いわけではない。知徳があることで尊い。国は、人と同じで、腕力があるからといって尊いわけではない。痩せても知識があるのが尊い。国は、人と同じで、容貌が美しいからといって尊いわけではない。正直、律儀、自由、温良が尊い「一九〇八（明治四一）年一〇月日記」。

というものもある。田中によれば、国は大国であることによって尊いわけではない、軍事力があることで尊いわけでもない、偽りの文明で繁栄していることからといって尊いわけでもない。徳があり、知識があり、正直、律儀、自由、温良であってこそ尊いのである。

田中は

いたづらに富国強兵を夢見つつ、国の根本玉なしにするな。

言うまでもなく、政治の基は人民に存する「一九一二年（明治四五）六月「足尾銅山の誅伐は我々の権利なり」。

という。田中にとって価値があるのは、富国強兵による日本の軍事大国化でなく、国の根本であり政治の基である人民を大切にす国家なのであった。

### 惻隠の情

孟子の言葉に

惻隠の心無きは、人に非ざるなり。

というものがある。あわれみ、いたむ心のない人は、人でないという意味である。

田中正造の言葉に

悪徳鉱業主のために被害激甚地の小児が死亡したのは、すなわち殺されたも同じである。これを等閑にすれば人類社会に非ず「一八九九（明治三二）年七月書簡」。

というものがある。鉱毒のため天命を全うできない「非命の死者」の存在を知り、憤った田中の言葉である。鉱毒のた

め被害激甚地の小児が死亡したのは、殺されたと同然であり、これを省みないようでは人間社会でないという。

他の人々もこの事実を知れば憤るであろうと、田中は

およそ人類同胞の境遇にある者、この非命の死者ありと聞いて、誰がこれを悲しまないであろう。もし悲しまない者がいるとすれば、それは悲しまないのではなく、知らないだけである。

として、人々に知ってもらうべく「鉍毒非命死者談話会」を各地で開催していく。

しかし、存外、人々は無関心であった。田中は

鉍毒加害のために小児が多く死んでいるということを聞きながら、犬猫の死んだほどにも悲しまない。なんとかしてこの人類社会の腐敗を一洗したい。

と嘆かざるを得なかった。

林竹二は田中のことを

隣人の指の痛みが、そのまま自分の指の痛みになってくる。そして、じっとしていられない。そういうものが田中正造の行動を支えている。そういう動機が、彼を突き動かしている「林一九七六b」。



と述べている。田中は他人の痛みを自分の痛みとして感じ、感じるだけでなく、じっとしていられずに行動する、そういう人だというのである。

田中自身は自らについて

予の多年の楽しみは何かというところ……社会の最も勢力なき弱き人々を合わせて強き暴慢を排することである。私の行為の十中の九はこれである。「最弱を以て最強ニ当たる」ことが私の楽しみである「一九一〇（明治四三）年八月の日記」。

と述べている。弱い人、困っている人がいると黙っていられずに、「最弱」の立場で、彼らとともに「最強」を相手に闘うのが田中という人であった。それはまさに孟子の「惻隱の情」を実践した人生であった。

### 三 田中正造の思想的因子

林竹二は、田中の思想形成について

「封建世」において鍛えあげられた堅固なものが、新しい価値にささげられた生活を支持しながら、見事に封建的なものの限界の突破に役立っている【林一九七七】。

と述べている。すなわち、旧幕時代に名主として領主層に抵抗した六角家騒動を通して鍛え上げられた「抵抗の根」が、明治維新以降の西洋近代思想の導入によってもたらされた人権意識を支え、それらが総体となって田中の足尾鉞毒問題における人権擁護の闘いとなっていたというのである。

花崎皋平は、田中の思想を「西欧」と「土着」、「近代」と「伝統」の総合をはかったものであると規定し、田中を自己の体験をつうじて人生の意味を深く思索した人、その思索が民衆のあいだを脈々と流れる精神活動の歴史の普遍的原理にふれるにいたった人

と評価している。花崎によれば、田中は「未分化な混沌をふくみながら、その一身において知識人と民衆の二つの文化の総合という課題を生き、将来へ向けて指し示していた」人であり、

知識人の西欧型自由・平等思想と庶民の在来型・土着型の自由・平等思想との亀裂を埋める文化総合という課題を生き、将来へ向けて指し示していた「花崎一九八四」。

という。また花崎は、田中の「生涯を貫く政治理念は憲法と人権であった」が、同時に「幕末にまなんだ儒教倫理を自家葉籠中のものとして活用もした」とも述べている「花崎二〇一〇」。すなわち、田中の思想は「西欧」と「土着」、「近代」と「伝統」の総合をはかったものであり、その思索は日本民衆の間を脈々と流れる精神史の普遍的原理に触れ

るものであった、田中は知識人の西欧型自由・平等思想と庶民の在来型・土着型の自由・平等思想を総合させるという課題を生きた人であり、近代の憲法と人権を生涯の政治理念としながらも、同時に旧幕時代の儒教倫理を自家葉籠中の物として活用してもいたというのである。

近世思想史研究者の布川清司は、田中の思想の特質について

田中正造は伝統思想と近代思想をとにもつた人であった。……両者がないまぜになって総体としてかれを支えていたのである。伝統思想に価値がないなどとはかれはまったく考えていなかった。それどころかかれは伝統思想を近代の時代に生かそうと努めていたのである。かれの努力は、簡単にいえば、伝統に基づく革新である。

と述べ、とりわけ

正造が近代の時代にとりいれようとした近世的伝統思想の最たるものは、民衆の生活を最優先すべしという近世の儒教的政治理念であつたろう。……この近世の儒教的政治理念はそれを省みない近代において、民衆側の抵抗権となつて復活するのである。近世的伝統思想をつきつめることによって、意外にも西欧の近代思想に通じるラジカルな思想が生まれたのである〔布川一九九七〕。

という。すなわち、田中は伝統思想と近代思想を共に持った人であり、両者がない交ぜになって総体として彼を支えて

おり、とりわけ「民衆の生活を最優先すべし」という近世の儒教的政治理念」を近代に取り入れようとし、そのことが民衆の抵抗権というラジカルな思想を生み出したというのである。

小松裕は、布川よりも田中の近代的側面を重視し、田中は人権思想など西洋近代思想の良質な部分を、自らの体験に照らし合わせて我が物とし、そのことを通じて日本民衆の伝統的な思想に新たな光を当て、その可能性をさらに豊かなものにした「伝統Ⅱ近代」型の民衆思想家であると規定している「小松二〇〇一」。

以上の先行研究の知見から、田中正造の思想を形成した因子として、第一に伝統思想、第二に名主としての経験（これは、一つには被治者として村民を代表して領主層に抵抗したこと、二つには他方で村民を指導する立場にあったという二重の意味を持つ）、第三に西洋近代思想の影響、第四に足尾銅山鉍毒との闘いという実践、以上の四つを指摘することができる。

私もこれらの諸因子によって田中正造の思想が形成されたと考えている。本稿はそのうち伝統思想の系譜の一つである儒教倫理のうち、孟子と田中の関わりと、田中の思想に対する孟子の影響について考察した研究ノートである。田中は孟子から強い影響を受け、また先に見た薄田のエピソードが示すように、何度も孟子を読み直し、主体的に捉え直していた。孟子の「民を貴しとなす」という思想や王道国家論（小国主義）、惻隱の情などは田中の中で血肉化され、彼の闘いと思索の糧になっていたと思われるのである。

【参考文献】

- 小林勝人訳注 (一九六八年) 『孟子』 上巻、岩波書店  
 小林勝人訳注 (一九七二年) 『孟子』 下巻、岩波書店  
 小松裕 (二〇〇一年) 『田中正造の近代』 現代企画室  
 小松裕 (二〇一三年) 『田中正造』 未来を紡ぐ思想家——『岩波書店 (原著は『田中正造』—二世紀への思想家—) 筑摩書房、一九九五年)』  
 商兆琦 (二〇一三年) 『田中正造研究』 以前の正造像 『東京大学日本史学研究室紀要』 第一七号  
 薄田泣菫 (一九四〇年) 『唐辛』 『艸木虫魚』 創元社  
 花崎皋平 (一九八四年) 『生きる場の風景』 その継承と創造——『朝日新聞社』  
 花崎皋平 (二〇一〇年) 『田中正造と民衆思想の継承』 七つ森書館  
 林竹二 (一九七六年 a) 『田中正造の生涯』 講談社  
 林竹二 (一九七六年 b) 『農民自治の思想と田中正造』 『季刊田中正造研究』 三号、伝統と現代社  
 林竹二 (一九七七年) 『田中正造』 その生と戦いの「根本義」——『田畑書店』  
 布川了 (一九七六年) 『左部彦次郎の「背反」』 渡良瀬川鉞毒シンポジウム刊行会編 『足尾銅山鉞毒事件・虚構と真実』 渡良瀬川鉞毒シンポジウム刊行会  
 布川清司 (一九九七年) 『田中正造』 清水書院  
 前澤敏 (一九七七年) 『正造の読書遍歴』 『田中正造全集月報』 二 『岩波書店』  
 三浦頭一郎 (二〇一七年) 『田中正造と足尾鉞毒問題』 『土から生まれたリベラル・デモクラシー』 『有志舎』

(本学法学部教授)